様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ３０ 日現在

機関番号：３７１１７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０５５３

研究課題名（和文）トンキン通事系語学資料による文献方言史研究

研究課題名（英文）A Philological Study of the History of Dialects Using Language Learning Resources Compiled by Tonkin Interpreters

研究代表者
高山　百合子（TAKAYAMA, Yuriko）

筑紫女学園大学・文学部・教授

研究者番号：７０２０６８９５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、寛政期にトンキン通事（ベトナム語通訳官）魏 龍山が編纂した『訳詞長短話』他の語学資料を対象に、その中に認められる近世後期長崎方言の要素を、現在方言と関連づけていくことを目的とする。
　研究期間中は主に文法分野に取り組んだ。とくに〈動詞の活用〉に関する研究、および〈人称詞を含む敬語表現〉に関する研究を中心的に行った。
　トンキン通事系語学資料の日本語訳文には、活用が一定しない動詞が見られ、現在の九州方言との関連が想定される。敬語については、資料の中心言語である中国語の表現より、場面に応じた細かい使い分けがなされていた。それを方言史に位置付けられるか、さらに検討したい。

研究成果の概要（英文）：　The purpose of the study is to relate the elements of the late-early-modern-period Nagasaki dialect recognized in the targeted YAKUSHI-CHOTANWA compiled by Gi Ryuzan, a Tonkin(Vietnamese) interpreter in the Kansei period, and in other language materials, to the current dialect.
　The author mainly worked on grammatical aspects during the research period. Especially, research related to the “conjugation of verbs” and “honorific expressions including personal pronouns” was focused on. Verbs with erratic conjugations were observed in the Japanese translations of language learning materials compiled by Tonkin interpreters; it can be surmised that these are related to the current Kyushu dialect. With respect to honorific expressions, more detailed distinctions according to the situation than expressions of the Chinese language, the primary language of the materials, were made. The author would like to further examine whether these can be positioned within the history of dialects.

研究分野：日本語史学

キーワード：長崎通事　トンキン通事系語学資料　魏龍山　近世後期長崎方言　現在方言　文献方言史　動詞活用　敬語史

１．研究開始当初の背景

(1)長崎歴史文化博物館蔵『訳詞長短話』を始めとするトンキン通事系資料には以前から注目してきたが、「魏氏仮名」と呼ばれる特殊な文字が使用され、読み下しに困難があるなど、その資料性に疑問を感じないわけではなかった。そこで改めて、中心資料となる『訳詞長短話』について、成立時の歴史的背景を考慮して資料の信頼性を見直してみた。その結果『訳詞長短話』が、対外政策上の基礎資料収集を急ぐ長崎奉行中川忠英の命を受けて成立した経緯が確認できた。いわば当時の長崎という都市の置かれた状況が、そのまま本書成立につながっているといえ、調査対象として一定の信頼性があると考えるに至った。

(2)寛政期にトンキン通事魏龍山が編纂した『訳詞長短話』は、中国語、ポルトガル語、ペルシャ語の会話語彙集であり、またベトナム漢字音、さらには長崎方言資料ともなり得る特異な語学資料である。これに同じく魏龍山の編著とされる『東京異詞相ｼｭｳ（言ベンに集）解』（トンキン語の会話語彙集）、『南詞ｼｭｳ解』（ポルトガル語の会話語彙集）を加えたトンキン通事関係語学資料は、「魏氏仮名」が使用されていることもあり、未だ言語資料としての全容解明には至っていない。複数の外国語を長崎方言話者が記載していると考えられる点には、方言資料として期待が持てる。一種の外国資料として詳細に調査すべきとの思いを強くした次第である。

２．研究の目的

(1)長崎通事関係の資料には、唐通事の関わる唐話資料、蘭通詞の関わる蘭学資料などに、地役人であった通事たちの母語、つまり長崎方言が反映していることはすでに指摘されている。本研究の対象であるトンキン通事系資料についても、岡島冠山の著作と併せ、以前、方言語彙を指摘したことがある（拙稿「方言資料として見た長崎通事の語学書―魏龍山「訳詞長短話」及び岡島冠山の諸著作など―」（『語文研究』59 号、昭和 60(1985)年 6 月）。

(2)そのほか先行研究の成果を踏まえながら、本研究では、トンキン通事関係語学資料に反映した近世後期九州・長崎方言の実態を、音韻、文法、語彙など幅広い視点から探っていき、現在方言に至るまでの変化の様相をあとづけることを目的とする。

３．研究の方法

(1)音韻史、次いで文法史、語彙史と、分野ごとに調査を進めていくという方針で取り組んだ。

　音韻史については、中国南方方言を中心に、貿易を通して日本と関わりの深かった方言の音韻体系を先行研究によって把握し、トンキン通事系語学資料に記された中国語の出自を明らかにしようとした。基本的には福建方言であると考えてよいと思われるが、補助的符号の使用を含め、分析しづらい面もある。ベトナム漢字音についても、本来なら同様の同定作業が必要であるが、ベトナム語方言の資料が入手できていないため、現代語との比較にとどまっている。以下、ポルトガル語、ペルシャ語についても、キリシタン資料や現代語辞書などを利用しての同定作業の段階である。それら外国語の発音をどのように表記しているかを整理し、当時の長崎方言の音韻、発音傾向を考察する手がかりを得る。

(2)文法・語彙研究については、現在方言の実態、および方言書、さらにはキリシタン資料、狂言、抄物など中世口語資料を参照しながら、断片的にはなるだろうが、変化・変遷した事象を掬い上げその過程を推定していく。

　ただし、研究期間中は主に文法研究を中

心に行なった。動詞活用について方言調査を行なうなど、文献調査に止まらない研究となった。

４．研究成果

(1)次項５に記すとおり、現在論文化できているのは、主に動詞の活用についての調査研究である。これについては、研究代表者が肥筑方言を母語とし、長崎とは隣接する佐賀方言の話者であることから、九州西北部方言というとらえ方で考察しようと試みたことがきっかけとなった。

九州方言は、動詞の活用についていえば、二段活用が残り、五段活用化が進んでいることで知られている。この五段化の例が、『訳詞長短話』にも見られる。アクル(開)、アケヨと二段活用する中に、アカラヌという五段化した用例が、日本語訳文の中に認められる。

小林　隆『方言学的日本語史の研究』（2004）でも指摘するとおり、ラ行五段化は日本の比較的周辺部で盛んで、中央部、都市部では低調である。その中で九州は、南部に多少の空白箇所はあるものの、全域的にラ行五段化が進行していて、全国有数のラ行五段化先進地域であるといえる。

このラ行五段化が、18 世紀の終わり、長崎で起こっていたことが、トンキン通事系語学資料で確認できる。上一段、下二段動詞に五段活用化の傾向が強いことが指摘されているが、トンキン通事系資料での用例も、やはり下二段動詞である。現在方言につながる現象が認められる資料として評価できると考える。

(2)アカカ・ウレシカなど、形容詞・形容動詞のカ語尾も、九州西部方言に根強く使われている形式である。このカ語尾をも含め、神部　宏泰『九州方言の表現論的研究』（1992）は、九州西部方言の文法面での「体言化傾向」を指摘している（ｐ13～15）。「体言化傾向」とは、文表現の末尾、あるいは要所を、とかく体言、あるいは体言的発想によって叙述しようとする傾向だとする。カ語尾も体言性の接辞的な性質を帯び、カ語尾形容詞全体が、体言的な機能を持つと述べている。

佐賀、長崎方言には、神部の言う「体言化傾向」が認められるのではないかと考える。それはある種まとまりを成す働きともいえる。トンキン通事系資料に見られる中国語を含む異国語と日本語の、1 対１対応の要素ごとのひじょうに固定的な日本語訳の付し方に、方言からの影響がないかと考え、考察を試みた。結果としては、まだ明確なものは得ていない。

(3)方言音韻史に関わる調査は、現在中断しており、中途半端な状態である。本研究では重要なテーマと捉えており、今後逐次成果を出していかなければならないと考えている。

(4)目下取り組んでいるのは、人称詞を含む敬語表現体系の分析である。中国語に付された日本語訳文には、もとの中国語よりきめ細かい敬語の使い分けがなされており、中国語に忠実に訳すことより、文脈に応じて、場面にふさわしい待遇表現を選んでいることが読み取れる。この分析、解明も、重要なテーマだと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

①<u>髙山　百合子</u>、肥筑・佐賀方言における動詞ラ行五段化をめぐって、筑紫日本語研究 2015（筑紫日本語研究会）、2016、pp.63－72

②<u>髙山　百合子</u>、佐賀方言における用言の「語幹化」、筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報、No.26、2015、pp.169

－177

③髙山　百合子、佐賀（市）方言の動詞活用―「語幹化」の視点から―、筑紫日本語研究 2014（筑紫日本語研究会）、2015、pp.60－66

〔学会発表〕（計 3 件）

①髙山　百合子、佐賀市方言における動詞五段化、第 65 回西日本国語国文学会研究発表会、平成 27(2015)年 9 月 20 日、長崎大学（長崎県長崎市）

②髙山　百合子、肥筑方言の動詞五段化をめぐって、第 261 回筑紫日本語研究会、平成 27(2015)年 8 月 11 日、九州地区国立大学九重共同研修所（大分県玖珠郡九重町筋湯）

③髙山　百合子、佐賀（市）方言の動詞活用―「語幹化」の視点から―、第 257 回筑紫日本語研究会、平成 26(2014)年 12 月 27 日、九州大学（福岡県福岡市）

〔その他〕

①髙山　百合子、【コラム】近世後期の「国際化」と長崎通詞、筑紫語文（筑紫女学園大学日本語・日本文学科）、No.25、2016、p.80

②髙山　百合子、列島縦断！日本全国イチオシ方言【佐賀県】、日本語学（明治書院）、2016 年 1 月号、2016、pp.90－91

６．研究組織

(1)研究代表者

髙山　百合子（TAKAYAMA, Yuriko）
筑紫女学園大学・文学部・教授
研究者番号：７０２０６８９５